

葬送儀礼(葬儀)について 8

最近では枕経と仮通夜を混同している傾向が見られる。
本来は別なものである。

枕経は死後、枕飾りが出来上がったら行うもの。

徳川幕府のキリシタン弾圧政策によって死後、その人が仏教徒であることを証明する必要があった。
死体改めをするのは僧侶でありそのため、日本では江戸時代以降に寺請制度、檀家制度が定着し枕経として現在に残った。

仮通夜

現在では死後、葬儀までに何日も過ぎることは稀だ。
告別式の日がちが友引に当たる場合などに仮通夜を一日設けることがあるがそれ以外にはあまりない。
(火葬場は友引に休館日としている所が多い)

仮通夜の時は死者と遺族がともに寝るといふ風習が有り、これを「夜伽(よとぎ)」「添い寝」という。
他には「仏まぶり」ともいうが全て「お籠り」から始まった言葉である。

通夜

もともと夜を通して過ごすという意味。
死の穢れのため別な場所、喪屋・霊屋・忌み屋(もや・たまや・いみや)で過ごした。
そこまでのことをできない一般の人々は部屋を仕切り、そこで火葬の前夜に一緒に過ごすようになった。
それが通夜である。

密葬の勘違い

同居家族だけの小さな葬儀を密葬と言っている方達が多いが個人(家族)葬とは全く別なものである。
子ども達が海外に居住しているなどの場合、すぐに帰国できない場合がある。
そのような時に仮の葬儀として密葬が行われる。
お寺さんや葬儀社に「密葬で・・・」などと聞きかじったことを言うと「本葬はいつですか」と聞かれることになる。
密葬では香典も供花も出さないの注意願いたい。
さらに密葬の意味を知っている人に「今回は密葬で・・・」などと言うと先方は小さく施工しているので配慮して行かないこともある。
それは、本葬の時に参列しようということだ。
本葬の時には既に火葬され茶毘に付されている。

法事法要

葬儀終了後に行う仏事が法事法要である。

本来、仏法の儀式、行事であるが、現代社会では死者の追善供養のための儀式となっている。

火葬場から戻り初七日忌法要も葬儀のひとつと思っている方もいるが葬儀とは全く違う。

(收拾舎利の法要)

葬儀は周りの人達が喪主、施主の気持ちを考えて全て行ってくれるが法要は違う。

特に施主が座ったままというのは参列者に失礼にあたる。

三十三回忌、五十回忌を法事の一区切りの目安とされてきたが現代ではさらに短縮されている。

寺院の行事でお施餓鬼法要というものがあるが出来る限り参加し先祖供養するのが本来であろう。

お布施

1, 通夜・葬儀の布施

2, 戒名料

3, 初七日忌法要・お車代・御膳料

フルセットの葬儀ではお布施を別々に包むことが多い。

数珠

念仏、念誦(ねんじゆ)の回数を数えるために用いるもので念珠ともいう。

珠の数は百八が本来の形(煩惱の数を表している)

人間の煩惱を取り去る目的で持つのが数珠。

五十四、四十二、二十七、二十一、十八、十四の数もある。

擦り合わせて音をたてる人がいるが僧侶が鳴らすのは合図のためであり一般の人はすべきではない。

数珠にはひとつだけ大きい珠があるがそれを親玉という。

人が集まりまとめ役になるような人を親玉という語源は数珠からであるらしい。

葬儀の曲友(かねとも) 札幌

<http://kanetomo.2lala.net>

曲友(かねとも)